

エスノメソドロジカル・センス — いま、ソーシャルワーカーに求められる力とは —

藤 田 徹

Ethnomethodological Senses : Ability Required for Social Worker

FUJITA Toru

本論は、ある施設虐待事件を通して、改めてソーシャルワークの専門能力が抱える「理論と実践のかい離」をめぐる課題の本質を見極める作業と、それを解消する手立てとしてエスノメソドロジエを導入する意義と効果の検討を目的としている。特に《いま-ここ》におけるソーシャルワーク実践の構築的特徴の提起を通して、エスノメソドロジエの導入の有効性を説明する。また、それを「エスノメソドロジカル・センス」としてソーシャルワーカーの専門能力へ位置づけ習得することの意義を指摘する。

キーワード：施設虐待 専門能力 理論と実践のかい離 《いま-ここ》「見られているが気づかれていない」

The purpose of this paper is to newly clarify the challenges surrounding the “Gap between theories and practices” which the social work expertise involves, and also to review the significance and effectiveness of introducing ethnomethodology to resolve them, through the abuse case in a certain institution. The effectiveness of introducing ethnomethodology is discussed by raising the constructive features of social work practices «hear and now» in particular. Also, they are positioned as the “ethnomethodological senses” in the social worker’s expertise to assert the significance of their acquisition.

Keywords : institutional abuse professional ability “the gap between theories and practices” “now and here” “seen-but-unnoticed”

1. 「理念の暴走」

2015年6月某日、報道ステーション(テレビ朝日)のトップニュースで報じられた内容に衝撃を受けた。山口県下関市の障害者支援施設で知的障害の利用者へ「暴言を浴びせながら胸ぐらをつかみ体を揺さぶり、額を3回平手打ちした」容疑で元支援員の逮捕を伝える報道であった。施設虐待事件自体は、忌々しい問題ではあるが厚生労働省の報告¹⁾にもあるように特に珍しいことではない。それが全国放送で異例のトップニュースとして扱われた理由は、おそらく虐待告発のために同施設の関係者が隠し撮りした衝撃的な暴行映

像にあったように思う。番組では、暴行シーンが繰り返し流され、元支援員の実名、年齢、そして画像処理されないままの本人がインタビューを受ける姿が映し出されていた。それは、各キー局のニュースでも同様の扱いだった。またこのニュースは、ネット情報としてもユーザーによる反応を加えつつ瞬く間に拡散していった。

この一連の事態に対して、ソーシャルワーカーの養成教育に携わる者として冷や汗が出た。逮捕された元支援員は、同施設で勤務13年目を迎えるベテラン職員だという。障害者施設の生活支援員は、社会福祉士

等の国家資格の義務づけはないが、元支援員が何らかの対人援助職の養成教育、あるいは現任教育を受けてきた可能性は高い。また周囲の園長を始め他の支援員においても、何らかの理解があつての職業選択であるとするれば、彼らも養成教育等の機会を経て現職にあると考える方が自然である。彼らが修得したであろう専門能力は、この事件の抑止力にはならなかったということなのか。筆者は、ソーシャルワーカーとして現場へ足を踏み入れた多数の卒業生たちが、この事件のような事態へ巻き込まれない保証はないと率直な危機感を持った。もちろん、虐待の当事者になるとは思わないが、虐待の通報者²あるいは虐待を放置した周囲の職員という立場に追い込まれるリスクがあることをこのニュースを通して痛感させられた。

上記のようにこの事件が通常以上に世間の注目を浴びた理由は、やはり生々しい暴行映像にあったといえよう。実はこの事件に限らず最近の施設虐待事件では、虐待場面の録画や録音を証拠として発覚するケースが増えている。特に職員による虐待を疑った家族等が、小型のカメラやレコーダーを設置してその虐待の事実を掴み、告発する事件が目立っている。このこと自体、認知症や知的障害の利用者など自らをプロテクトする力が弱くかつ第三者の目の届きにくい施設環境において、周囲が本人を守るためにやむにやまれずとった行動といえるだろう。今後このような証拠に基づく施設虐待事件は、増加する可能性がある。

さて、当該事件を起こした元支援員は虐待の事実を認めた上で記者から暴行理由を問われると、「指導の一環という僕の中のあれ」と答えている。この「指導の一環」という発言とテレビに映し出された暴行シーンが、あまりにもかけ離れていることは誰の目から見ても明らかである。いずれにしろこの発言と結果のギャップは、元支援員によるソーシャルワーカーとしての「結果責任」の放棄と言ひ換えられるだろう。どのような崇高な理念を謳おうが、いかなる場合でもソーシャルワークの専門職としての正当性は、具体的な場面における可視化、つまり「結果」において達成されなければならない。これは、元支援員の「結果責任」を放棄した「理念の暴走」が招いた事件といえるだろう。

しかし、この「理念の暴走」による事件を、一部の不適格者がしでかした稀有な事例として片付けることができるだろうか。その背景には、ソーシャルワーク

の専門能力が抱える深刻なアポリアが横たわっているようにみえる。それが「理論と実践のかい離」の問題である。これを簡潔に示せば、ソーシャルワークの養成教育の中心として修得される「知識・倫理・価値・理論・方法等」=「理念」（理想に根ざすという意味において）が、状況超越的な位置にあることにより、それ自体では必ずしも実践を捉える力にならないことを意味している。つまり「理念の暴走」とは、ソーシャルワークの専門能力において「理念」を適切な「結果」へ繋ぐルート（実践）が担保されず、そこにはトートロジーとしての「理念」だけが残され恣意的に選択された実践に対して、たとえそれが本事件のような暴力行為であったとしても、その「理念」を盾に正当化する言説を指している。まさに元支援員による発言は、「指導の一環」という「理念」による自らの暴力行為を正当化しようとする歯止めを欠いた「暴走」の証である。

この事件は、元支援員の援助者としての資質、そして当該施設の運営管理上の瑕疵が招いた結果であることに間違いはない。しかし、その背景には、上記のようなソーシャルワークの専門能力が抱える構造的欠陥が存在し、それが本事件の呼び水となっていたという見方もできるようなにも思う。そうであるとすれば、そのことは専門職として「結果責任」を問われるソーシャルワークにとって存立危機事態に関わる問題である。

本論は、このソーシャルワークの専門能力の課題、つまり「理論と実践のかい離」を乗り越えるための専門能力を、エスノメソドロロジー=「人々の方法」の発見・記述を目指すエスノメソドロロジー³に基づく〈エスノメソドロジカル・センス〉として検討することを目的としている。

II. ソーシャルワーク実践の構築的特徴

ソーシャルワーク実践に限らず社会生活におけるすべての実践は、《いま-ここ》の場面が間断なく更新される過程の集積である。つまり《いま-ここ》の場面が次の《いま-ここ》の場面の根拠となりその連続的な結果として、ひとつの実践が成し遂げられていく。そういう意味では、実践は《いま-ここ》における状況的・偶然的特徴を宿した現実構築の所産といえよう。しかし実践は、《いま-ここ》における個別的条件だけですべてが賄われているわけではなく、そこにはその実践を社会的活動として成立せしめるための

一般的な特徴が作用している。それが言語を代表とする記号の役割である。記号は、その実践の常識（共通主観性）を担保する極めて重要な「リソース」「ツール」としての役割を果たしている。

当然このことはソーシャルワーク実践にも妥当する。例えば、相談援助の機会も、クライアントとソーシャルワーカーの《いま—ここ》の場面における相互行為の連続の過程として達成される。またその実践において、記号としての言語（理論、モデル、制度、方法・技術等）、さらには表情、態度、服装、あるいは相談室のアーティファクト等を《いま—ここ》における場面の展開に応じて、それらを「リソース」あるいは「ツール」として活用するからこそ妥当な相談援助がタイムリーに産出されるわけである。

しかし通常、上記の実践の構築的特徴について、われわれは容易には捉えることはできない。それはふだんのわれわれが、それらに対して「見られているが気づかれてない（seen-but-unnoticed）」立場に置かれているからである。それが、われわれの日常的な実践を素朴に自明視していることからくる必然的な認識のあり方である。つまりそれらはあまりにも当たり前すぎて、それらに問題があるなどと考えることなど思いも寄らない単純で順当な活動と見なすことによって起こる意識作用を指している。

さて、改めてソーシャルワーク実践の構築的特徴を整理したい。まずソーシャルワーク実践は、常にコンティンジェントな領域におかれている。上記のように実践は、《いま—ここ》における場面の集積において構成される。確かにそれに対して大まかな想定は可能かもしれないが、その展開の詳細を事前に予想することは困難である。ソーシャルワーカーは、眼前のクライアントへ相談援助を施す場合、《いま—ここ》で得られる情報をその実践のコンテキストに応じつつ課題や目的として見極め、それらに有効と考えられる知識（制度、法律、理論、モデル、方法・技術等）を当てはめ活用しながら、その都度それら課題の解消と目的の達成を繰り返しクライアントのニーズの最終的な充足を目指していく。

もちろん、クライアントのカテゴリーに応じた「教科書＝理論・方法等」⁴に基づくソーシャルワークのプロトタイプを設定することは可能であるが、実践における極めて詳細で複雑な課題を掬い取るには、それらの枠組は網の目としてあまりにも大きすぎる。現場の

ソーシャルワーカーは、「教科書＝理論・方法等」も一つの「リソース」「ツール」として活用しながら、しかしクライアントの置かれている状況、それは《いま—ここ》における経済的・社会的・精神的・身体的事情等を見極めそれぞれの解消にとって有効な手段を理に適った形で結びつける作業へ日々取り組んでいる。それがソーシャルワーク実践のコンティンジェントな特徴を表している。

さらにソーシャルワーク実践のもう一つの特徴が、藤田が『エスノメソドロジカル・ソーシャルワーカー「手続論的転回」と「気づきのメソッド」の類似性へ寄せて—』（2015）で触れた「気づきのメソッド」（藤田，2015，pp.59）の仕組みである。現場では、その実践が取り組まれる事前の段階でそれに対する「正解」を用意しておくことはできない。なぜならば第一の特徴として挙げたコンティンジェントな課題へソーシャルワーカーは、常に晒されるからである。クライアントの状況や場面の展開次第で向き合うべき課題は揺れ動き、それを見定めて適切な援助を実現することが現場のソーシャルワーカーに求められる能力といえよう。

しかし、それらの手立てのための「正解」を、その実践の〈外側〉へ求めることはできない。その理由は二つ挙げられる。一つは、ソーシャルワーク実践それ自体が固有の実践だからである。ソーシャルワーカーが置かれた立場、クライアントの事情、その両者の下で交わされる相談援助等、そのどれをとっても固有の条件において実態化しかつ成立している。それを、単純に「教科書＝理論・方法等」を代表とする〈外側〉の言説へ求めたとしても、その実践の間尺に合う「正解」を得ることはできない。

二つめは、ソーシャルワーク実践が「《いま—ここ》の場面が次の《いま—ここ》の場面の根拠と」する仕組みを前提とするならば「《いま—ここ》における実践」から連なる次の実践へ向けたソーシャルワーカーの態度は、実践の蓄積、つまりそれまでの自らが積み重ねた実践を踏まえた「気づき」として〈外側〉からではなく〈内側〉から引き出されるからこそ、その実践の「正解」としての妥当性が担保される。それらの必然から用いられる「気づきのメソッド」こそが、もう一つのソーシャルワーク実践の特徴といえよう。

しかし以上の内容は、これまでの社会福祉研究領域⁵が足場を置く視座からは引き出すことのできない理解である。それは社会福祉研究領域での基本的な言

説展開が、ソーシャルワーク実践に対してその〈外側〉に位置づけられる「教科書＝理論・方法等」を軸として行なわれ、実践の〈内側〉の現実構築、つまり実際のソーシャルワーク実践がどのように成し遂げられたのかを捉えることが困難だからである。もちろん、それらに基づく養成教育も同様の限界を抱えている。

この〈内側〉の議論は、エスノメソドロジーの視点に立つことによって初めて開かれるパノラマである。ソーシャルワーク実践が〈内側〉で構築されるという理解は、これまでの社会福祉研究領域（養成教育を含む）ではほとんど自覚されてこなかった視点である。言い換えればこれまでの社会福祉研究領域は、ソーシャルワーク実践をその〈外側〉、つまり当該実践と直接的でない理論やモデル等を枠組みとした説明や解釈に基づく専門能力の研究・教授へその中心を置き〈内側〉から当該実践を捉える方法の研究・教授の必要性が省みられることはほとんどなかった。それは「理論と実践のかい離」の別言の課題といえよう。

Ⅲ. エスノメソドロジーと社会福祉研究

社会福祉研究領域の「理論と実践のかい離」をめぐる課題の端緒は、恐らくケースワーカーが専門職を目指し始めた時代へ遡ることができよう。その象徴的な出来事が、1915年にボルチモアで開催された第42回全米慈善矯正事業会議での「フレックスナー講演」であった。フレックスナーは、医学を前提とした専門職としての6基準を示し、それを満たすことのできない「ケースワーカーは、専門職ではない」と断じた。これを契機として社会福祉研究領域は、専門職としての範を医学へ求める意欲を強め医療と社会福祉の本質的な相違を見極めることなく、またその必然として向かうべき対象を不問とした理論・モデル・方法・技術等の体系化へ傾倒していった。

またそれ以降も社会福祉研究領域は、心理学、経済学、法学、社会学等の関連科学の発展の後塵を拝する位置取りではあったが、それに準じた「実証主義」「客観主義」を軸とする研究史を歩みその領域構成を編んでいった。しかしそれらは医学へ示した姿勢同様、社会福祉として担うべき対象の本質を見定めることなく、関連科学の応用とした理論化、モデル化を先行させたものとなった。そして現在、その「実証主義」「客観主義」に基づく理論やモデルへの偏重に対して「反省的学問理論」⁶に象徴される反専門職主義の立場から

批判が行なわれ、新たなソーシャルワーク論の検討が模索されている。しかし、それらも「実証主義」「客観主義」の残照を払拭できない自己矛盾⁷を抱えている。

以上のように、社会福祉研究領域の足跡から「理論と実践のかい離」が避けられないものであったことが理解できる。このことは「ケースワーカーの専門職化」に対する当時の関係者の強い憧憬が招いた「焦り」による所産ではなかったのだろうか。それはまるで見えない敵に向かって弾を打ち込むための準備をしているかのようにも見える。その結果、フレックスナー講演から100年後に至る現在（2016）においても「理論と実践のかい離」は、われわれの行く手を妨げる高い壁となっている。

さて、藤田（2015）は、ソーシャルワーカーを阻むその壁を乗り越える方法の提起を行った。それが、ソーシャルワークの専門能力へエスノメソドロジーの導入を図ることである。エスノメソドロジーによるエスノメソドロジー＝「人々の方法」を「発見・記述」するアプローチは、ソーシャルワーク実践としての相互行為を捕捉する上でも、またその実践の《いま－ここ》における「正解」を引き出さねばならないソーシャルワーカーに求められる能力を見極める上でも、極めて効果的な手立てを提供するアプローチである。

まず期待される効果として、エスノメソドロジーによる「会話分析」「相互行為分析」⁸によって、これまでは〈外側〉からの「解釈」として捉えることしかできなかったソーシャルワーク実践を、《いま－ここ》における現実構築としての〈内側〉から発見・記述することへ道を開くことが挙げられる。

これまでのソーシャルワークは、ソーシャルワーカーとして取り組んだ実践を“実感”として捉えることはできても、それらを改めて対象化しなければならない場面で、例えばそれをケース記録へ起こす時、あるいはカンファレンスでそのケースを報告する際に、その実践に対する「断片的な事実」としての記憶とその大半を占める解釈を拠り所としなければならなかった。もちろん、断片的な事実や解釈であっても当該実践に基づくものであれば、その課題解消への「正解」のヒントになりうることを否定する必要はない。しかし、それらは「正解」を引き出す根拠としてはあまりにも脆弱である。特に解釈については、「I.」で触れた「理念の暴走」にもあるようなドグマ化への因子を排除することはできない。いずれにしろこの問題は

ソーシャルワークという専門職が、自らの実践を〈内側〉から「事実解明的」に対象化する能力を持たないことによって生じる課題といえよう。

それに対してエスノメソドロジーの会話分析や相互行為分析は、ソーシャルワーク実践に対して状況を逸した事実の確認ではなく、また〈外側〉からの解釈でもなく、「《いま—ここ》の場面が次の《いま—ここ》の場面の根拠と」しながら達成されるソーシャルワーク実践を〈内側〉から発見・記述することによる成果としてソーシャルワーカーへ提供することを可能にする。それは社会福祉研究領域において、エスノメソドロジーを活用することの大きなねらいの一つである。

ここで改めて、これまでの「エスノメソドロジーと社会福祉研究」に関連した限られた論稿⁹の中から、エスノメソドロジーを社会福祉研究領域およびソーシャルワークの専門能力へ導入する意図とねらいを確認したい。田中耕一郎(1994)は、おそらく日本で初めてエスノメソドロジーと社会福祉研究の関連を研究業績とした社会福祉研究プロパーといえるだろう。田中は、エスノメソドロジーの導入を「ソーシャルワークの研究・実践領域」(田中 1994, pp.169)の範囲での検討の意図を示している。しかしその中心とする内容は「ソーシャルワーカーによる、クライアント及びケースの解釈過程を分析するための枠組」(田中 1994, pp.172)としてのエスノメソドロジーの活用へ置かれている。それは田中の指摘のように、これまでのソーシャルワーク研究がソーシャルワーク実践を「倫理的に確認」するのみで「それ自体を分析」のテーマとすることがなかった(田中 1994, pp.174)ことから、必然的に引き出されたエスノメソドロジーへの期待を表すものといえよう。しかし田中が挙げた「実践領域」の課題は、「ソーシャルワークの一技法としても有効」(田中 1994, pp.181)としながらも、エスノメソドロジーのそれらへの活用についてはほとんど触れられず、「『ソーシャルワークとは何か』という、言わば存在論的視点」(田中 1994, pp.182)としてのエスノメソドロジーの有効性が強調されている。

さらに小坂啓史(2014)は、明確に「ケアの場に対する相互行為分析の応用可能性、有効性について検証」(小坂 2014, pp.21)するためにエスノメソドロジー研究を位置づけている。特に「ケアの場とされる空間の相互行為状況そのものを分析することでいかに『ケア』が成立するのか」(小坂 2014, pp.28)を見極め

る方法としてのエスノメソドロジーを評価している。小坂の理解は、正当なエスノメソドロジーの活用であり「エスノメソドロジー的無関心」¹⁰に基づく哲学的・方法的立場を尊重したものである。当然のことだが田中・小坂が期待するエスノメソドロジーによる成果は、社会福祉研究領域にとって極めて大きなメリットをもたらすことになる。それは田中(1994)が言うようにソーシャルワーク実践を理念的に捉えることはできても、その実践そのものを捉えることができないという、これまで大きく立ちはだかってきたアプローチの「壁」を乗り越える方法の提起だからである。

繰り返すようにエスノメソドロジーによるソーシャルワーク実践それ自体の発見・記述は、社会福祉研究領域にとって揺るぎない成果となるだろう。ではそのことは、ソーシャルワーカーの立場からどう受け止められるのであろうか。実は《いま—ここ》の実践へ向き合うソーシャルワーカーにとって、一つのソーシャルワーク実践に対するエスノメソドロジーに拠る成果は、これまでになく実態に忠実なデータにはなるが、《いま—ここ》におけるソーシャルワーク実践に対してあくまでも〈外側〉に位置する、言わば参考データにしかならない。つまり、そのデータは《いま—ここ》の実践をめぐる直接的な手段やツールとしての機能を果たせるわけではない。そのことを踏まえて、エスノメソドロジーのソーシャルワーク実践に対する、今一歩、踏み込んだ活用について検討したい。

Gerald de Montigny(2007)は、エスノメソドロジーがソーシャルワーク実践へもたらす効果を「実践に伴う相互反映性や文脈表示性、そこでのクライアントへの理解などを説明するツールを手にする事」(Montigny 2007, pp.95)にあると位置づけている。また同時に、エスノメソドロジーに基づくことで「ソーシャルワーカーへ、クライアントとの共同作業による日々の実践を発見するための気づきを与える」(Montigny 2007, pp.96)ことへの期待を示している。つまりMontignyは、エスノメソドロジーをソーシャルワークの専門能力そのものへ導入することを目論んでいる。なぜならばエスノメソドロジーが「《いま—ここ》における実践」を焦点化する意図と「第一線のソーシャルワーカーの興味と実践」(Montigny 2007, pp.97)が合致するからであり、それをソーシャルワークの専門能力へ繋げる意義を強く認めているからである。

Montigny のねらいは、エスノメソドロロジーの社会福祉研究領域への応用をさらに踏み込ませるものであり、それは、藤田(2015)による提起とも一致する発想である。次に、それらを「エスノメソドロジカル・センス」として検討を進める。

IV. エスノメソドロジカル・センス

エスノメソドロロジーをソーシャルワーカーに限らず、対人援助職の専門能力へ活用する取り組みを俯瞰してみると秋葉昌樹の成果が目を見く。秋葉(2008)の研究は、保健室における養護教諭と生徒との相互行為分析を足場としつつ対人援助職の実践的な能力の涵養へその視野が向けられたものである。特に「フォーラム・シアター」という技法を用いて、現役の養護教諭が日々の学校現場で抱える「名前のない問題」を当事者が即興劇として演じその場面の臨場感と共に課題の見極め、そして対応の手立てをエスノメソッドとして浮かび上がらせる取り組みを進めている。それらは、その場面から現場へ戻る養護教諭にとって、自らの専門能力をポリッシュする貴重な機会となっている。

秋葉(2009)がフォーラム・シアターを導入したのは、「エスノメソドロジカル無関心」に基づく会話分析や相互行為分析に伴うトランスクリプトの煩雑さやその分析の難解さを踏まえたとき、それらのエスノメソドロジストとしての能力を、そのまま多忙な業務を抱える養護教諭へ求めることは現実的ではないという判断があったからだ。つまり、フォーラム・シアターによるねらいは、《いま-ここ》における実践的場面を即興劇として再現することによって、エスノメソドロロジーを対人援助職のプラグマティックな技能(アート)へ宿らせることに置かれていたといえよう。それを、ここでは「エスノメソドロジカル・センス」という造語を用いて検討の俎上に載せたい。

上記のように、藤田(2015)は、ソーシャルワーカーの専門能力における「エスノメソドロジカルな能力」の有効性を主張した。エスノメソドロジカル・センスとは、その「エスノメソドロジカルな能力」の実践的な言い換えでもある。それは《いま-ここ》におけるソーシャルワーク実践において判断を求められるソーシャルワーカーが、当該実践の「文脈表示性(indexicality)」を踏まえつつ、誰もが了承できる「説明可能性(accountability)」を担保した方法によってその場面の妥当性を堅持し、その積み重ねを持って「相互反

映性(reflexivity)」としてのソーシャルワーク実践を達成する能力を指している。つまりエスノメソドロジカル・センスとは、これらエスノメソドロジカルな能力を《いま-ここ》のソーシャルワーク実践において発揮できるソーシャルワーカー自身の“力”を表示している。

しかしこの能力を語るうえで、なぜ「センス」という問題含みの言葉で言い改めなければならなかったのか。それは社会学の分析アプローチのひとつであるエスノメソドロロジーが、《いま-ここ》における社会生活の現実構築を会話分析や相互行為分析により、それ自体を「発見・記述」することへ徹するベクトルを持つからである。これらは、「Ⅲ」の田中・小西の論稿で確認した社会福祉研究領域のエスノメソドロロジーの活用のねらいとも一致するところである。エスノメソドロロジーは、ソーシャルワークであれば録画・録音されたソーシャルワーク実践を詳細なトランスクリプトへ転記し、それに基づく会話分析および相互行為分析を展開することによって、その実践のエスノメソドロロジー＝「人々の方法」を発見・記述することを目指すアプローチである。

もちろんエスノメソドロロジーによる成果が、ソーシャルワークの理解にとって無駄なデータであろう筈がない。上記したように、しかし《いま-ここ》のコンテンツ的な実践へ向き合うソーシャルワーカーにとってエスノメソドロロジーによるひとつの成果が、たとえ同じカテゴリーに属する課題の分析データであったとしても、《いま-ここ》におけるソーシャルワーク実践にとってそれらがダイレクトに繋がる手立てとなるわけではない。つまりその結果は極めて洗練されたものではあるが、あくまでも当該実践に対して〈外側〉へ置かれるべき成果なのである。

そうであるとすればソーシャルワーカーが専門職としてエスノメソドロジカルな能力を活用するということが、自らが携わる《いま-ここ》におけるソーシャルワーク実践を〈エスノメソドロロジー＝「人々の方法」〉として捉え、そして〈エスノメソドロロジー＝「人々の方法」〉として構築することこそへ置かれるべきことが明らかとなる。つまりエスノメソドロロジーが研究方法でありかつ研究対象である現実構築の仕組みであるエスノメソドロロジー＝「人々の方法」を直訳するものである限り、ソーシャルワーカーに対して過ぎ去ろうとする「《いま-ここ》の場面」をエスノメソドロロジー

=「人々の方法」として達成されていることへ気づき、すぐさまやってくる「次の《いま—ここ》の場面」もエスノメソドロジー=「人々の方法」に基づき構築できる能力を担保することを意味している。そしてこのエスノメソドロジカルな能力をソーシャルワーカーが〈外側〉の知識としてではなく当該実践の〈内側〉から発揮することのできる力として、あえて「センス」と形容している。それは、エスノメソドロジーのソーシャルワークの専門能力への活用を意図する Montigny (2007) や藤田 (2015) のねらいと一致する理解でもある。

例えば、こういう場面を想定しよう。特別養護老人ホームの生活相談員が、リビングのソファに座る利用者へ挨拶したところいつもと違う反応に気づく。返答がないのだ。もう一度多少大きめに挨拶すると、ビクッとこちらを見て挨拶を返した。その後このやり取りを数回経験し、生活相談員はそれを利用者の難聴の進行と理解し、それ以降は通常より大きめに挨拶をすることとした。さて、この対応の変化が日常生活の一場面に対する「気づきのメソッド」のなせるものであるとすれば、それはこれまでに繰り返された経験としての「いつも」を基準として「今回の挨拶」を偏差として捉え、それを持って引き出された認識であるといえよう。これは「教科書=理論・方法等」などの〈外側〉から持ち込まれた知識に基づく解釈としてではなく、それまでの経験(過去・現在・未来を含め)という〈内側〉から引き出された知識に基づく「気づきのメソッド」の働きといえよう。

しかし、おそらくこの「気づきのメソッド」は、《いま—ここ》の実践に対して「正解」を義務づけられたソーシャルワーカーが、自らの把握しうる情報をフル活用しながら、どうかこうにか「正解」を提案する取り組みであり、それにはソーシャルワーカー自身の経験あるいは熟練、感性や〈外側〉の知識力、また当該クライアントとの相性、そして当該場面の環境や組織条件等々の偶然的要因へ大きく依存せざるを得ないことが想定される。そして何よりも、当該実践に対して「見られているが気づかれていない (seen-but-unnoticed)」立場にあることからソーシャルワーカーは逃れることができない。つまり、「正解」の行方は、すべからず偶然的要因へ委ねられている。確かに今持てる力を出し切り「正解」を引き出そうとする努力は、ソーシャルワーカーとして極めて誠実な姿勢であり

ソーシャルワーカーの資質として評価されるべきことでもある。しかし、それが偶然的要因に左右され必ずしも結果の担保を意味するものではないとすれば、そのことを「専門職の仕事」=専門能力として位置づけることへの逡巡を禁じ得ない。

例えば、先の事例においてソーシャルワーカーは、クライアントの「言葉」の反応の遅れから「難聴の進行」への「気づき」を得たわけだが、改めて当該場面をエスノメソドロジー=「人々の方法」として捉えた場合、その相互行為を構成するアイテムは、挨拶の言葉のみならず、互いの視線、表情、動作等々を手段として進行・達成されていたはずである。しかしソーシャルワーカーは、「言葉」の反応の遅れと「ビクッ」という「動作」の一部等を数あるアイテムから判断材料として、言わばチョイスしたわけである。確かに一見すると、その相互行為を決定づける手段のプライオリティから引き出された合理的選択との見方もあるが、逆に言えばそのアイテムの重要度に関する一般的な解釈、つまり〈外側〉の解釈を単純に当て嵌めた理解に過ぎないという見方もとれるように思う。

もし当該場面をエスノメソドロジカルな能力を持って捉えることができるとすれば、「言葉」の遅れはもちろんのこと、それに連動するクライアントの「視線」や「表情」等の見極めも含め、場面に対して極めて合理的な状況把握を達成することができるように思う。もしもクライアントの発話と連動した「視線」が挨拶の発信者へ向けられず、「表情」の変化が「いつも」と比べ乏しいものと把握されたとすれば、それをエスノメソドロジー=「人々の方法」を軸として捉えたときに単なる「難聴の進行」のみならず、例えば「感情鈍麻」としての認知症の発症の兆しの見極めへ結びつくかもしれない。これがエスノメソドロジカル・センスの意味するところである。

改めて、エスノメソドロジカル・センスを論じたい。秋葉が言うようにエスノメソドロジストと同様の能力を習得することは、対人援助職にとって荷が重すぎるし、また対人援助実践においても必ずしも意味のあることでもない。しかしエスノメソドロジカルな能力は、対人援助職にとっても対人援助実践にとっても、対人援助としての適切な結果を導くための必須な「センス」なのである。それは日常生活の実践がエスノメソドロジー=「人々の方法」として達成されていることと同様に、対人援助実践もエスノメソドロジー=「人々の

方法」として構築されている事実を踏まえてのことである。そうであるとすればエスノメソドロロジー＝「人々の方法」を無視して、対人援助実践を理解することが不可能なことであるとさえ、いえるように思う。

エスノメソドロジカル・センスは、そのエスノメソドロロジー＝「人々の方法」をソーシャルワーカーが『《いま－ここ》における実践』で捉える能力を指し、またそれを適切に行使する前提としてエスノメソドロロジーへの理解を踏まえることが求められる。

しかしわれわれは、エスノメソドロロジー＝「人々の方法」に対して「見られているが気づかれていない (seen-but-unnoticed)」立場へ知らず知らずのうちに置かれている。端的に言えば“それをどうやったのかという過程”を忘却し、“その結果”だけを受け入れている。例えば、クライアントの自己決定の機会へ遭遇するソーシャルワーカーは、それを「クライアントが選び、そして決める」場面として経験するわけだが、おそらくそれに対してクライアントが「選び、決めた」ことについては、強く記憶しているしそれをケース記録へ書き置くことを忘れないだろう。しかし、それを「どう選び」「どう決めた」のか、つまりその自己決定の過程を振り返ることは滅多にないように思う。その結果がクライアントとソーシャルワーカーの相互行為、つまりエスノメソドロロジー＝「人々の方法」としてのやり取りがあつての結果であるにもかかわらず、である。

おそらくその場面では、ソーシャルワーカーからの選択肢の提案が行なわれ、クライアントはその説明を苦勞しながら聞き取り時には同じ内容の詳しい説明を求めつつ、結果へ導かれたかもしれない。その過程こそが、エスノメソドロロジー＝「人々の方法」の実現を指している。われわれは、その過程を確かに「見られている」のだが、それをお互いの積極的な加担によって構築されていることに「気づかれていない」のである。故に、エスノメソドロロジー＝「人々の方法」を認めることを難解なものにしてしまう。

そしてこの過程が隠されることこそが、ソーシャルワークの「理論と実践のかい離」の、言わば元凶といえよう。つまり社会福祉研究領域の成果としての「教科書＝理論・方法等」の内容が「理論と実践のかい離」という課題を抱え続けている理由は、それらを手段として構築されるべきソーシャルワーク実践の過程が念頭に置かれずにそれ自体が自己完結しているところへ

求められるように思う。

さてエスノメソドロジカル・センスは、「見られているが気づかれていない (seen-but-unnoticed)」ソーシャルワーク実践へ“気づく”ための能力である。それはクライアントとソーシャルワーカー双方が積極的に加担しながら達成されるソーシャルワーク実践を、エスノメソドロロジー＝「人々の方法」としての『《いま－ここ》における実践』を見極めそれへ続く次の『《いま－ここ》における実践』の構築を目指すために、ソーシャルワーカーが身につけるべき能力を指す。しかし、その能力のためには、エスノメソドロロジーというパースペクティブを修得し、それを「センス」として磨き上げる機会が不可欠である。

V. 「センス」を磨くためには

これまでの社会福祉研究領域からすればエスノメソドロロジーは、俄かには受け入れ難い要素を含むアプローチとして映るかもしれない。おそらくそれは、エスノメソドロロジーの『《いま－ここ》』に対する執拗なこだわりが、社会福祉研究領域の成果である「教科書＝理論・方法等」の普遍性を台無しにしかねない危険性を感じ取るからではないだろうか。確かにこれまでの社会福祉研究領域は、“混沌とした実践現場”に対してひとつの回答を提示することを使命として取り組まれ、その歴史がこれまでの数々の理論やモデルへ刻まれているといえよう。それらは、社会福祉研究領域にとっての金字塔である。

しかしエスノメソドロロジーは、それらの成果を活かしこそすれ台無しにすることなどありえない。なぜならばエスノメソドロロジーは、それらの成果がソーシャルワーク実践をエスノメソドロロジー＝「人々の方法」として構築するための「リソース」「ツール」として極めて重要な機能を担い、そのことによって実践の妥当性が担保されていることを証明することになるからである。つまりエスノメソドロロジーによって社会福祉研究領域の実践現場に対するねらいを『《いま－ここ》における実践』のレベルで果たされていることが確認できるわけである。それこそ社会福祉研究領域が、実践現場に対する使命を達成することでもあるように思う。

さて、その社会福祉研究領域に対するエスノメソドロロジーの役割を果たすためにも現場のソーシャルワーカーが、その専門能力の一部として「エスノメソドロ

ジカル・センス」を身につけることが不可欠である。しかし現在ソーシャルワークの養成教育の中心に置かれるものは、これまで通りの「教科書＝理論・方法等」の教授である¹¹。また、ソーシャルワーカーとしての実践能力を養う機会とされる「演習・実習」にあっても、その実践的な要素を十分に反映された教育・指導が行われているとは言い難い。特に実習は、貴重な現場経験を伴いながらその経験から十分な学習を引き出せぬジレンマを抱えている。

これを乗り越えていくためには、やはり社会福祉研究領域が「《いま－ここ》におけるソーシャルワーク実践へいかなる貢献を果たすことができるのか」という、いわば原点に立ち戻ることが求められる。それは「社会福祉研究の理屈へ実践者を合わせるのではなく、実践者の理屈へ社会福祉研究が合わせること」（藤田, 2015, pp.38）こそが、社会福祉研究領域の本来のあるべき立ち位置であるように思う。そこに立った時にこそ「エスノメソドロジカル・センス」の有効性が視野に入るのではないだろうか。今後は、この「センス」を磨くためのアイデアの検討が重要な取り組みとなるだろう。

なお、本研究は、平成 27 年度学部等研究費の成果の一部としておこなわれたものである。

注

- 1 厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 地域生活支援推進室による『平成 25 年度「障害者虐待の防止、障害者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果報告書（平成 26 年 11 月）』によると、全国で障害者福祉施設従事者等による障害者虐待の相談・通報件数は 1,860 件あり、さらに、その中で虐待の事実が認められた事例は 224 件あると報告されている。
- 2 虐待の通報は、法的にも対人援助の専門職の義務でありかつ通報者保護の規定もある。しかし現実には、通報者側のリスクが避けられない側面があることもまた事実である。
- 3 エスノメソドロジーは、研究者が社会秩序の根拠を説明する手前でその担い手である普通の「人々」が普通の「方法」でそれを達成していることへ注目するアプローチであることによって、研究対象と研究方法を同名称で呼ぶようになった。については両者を区別するため前者を意味する場合は、エスノメソ

ドロジー＝「人々の方法」とする。

- 4 基本的に、ソーシャルワーカー（社会福祉士）の養成校における資格取得のために修得すべきカリキュラムの範囲を示している。それが網羅された内容が教科書であり、その内容の代表が「理論・方法等」であることを意味している。
- 5 「社会福祉学」としない理由は、社会福祉研究が理論やモデルを持って完結すべき「学」でなく、常に実践へ開かれそれと連動する「領域」にあるべきことを名称として意図したからである。
- 6 三島亜紀子による造語であり、「エンパワーメント」「ストレングス（強さ）」そして「ナラティブ（物語）理論」等いわゆる社会福祉のポストモダニズムとされる理論を総称する概念（三島 2007 iv）として提示している
- 7 特に「ナラティブ（物語）理論」の批判については、藤田徹著『エスノメソドロジーによる社会福祉の研究・教育・実践の新たな「転回」』岩手県立大学社会福祉学部紀要第 16 巻 2014 pp.23-33 を参照。
- 8 「会話分析」「相互行為分析」（あるいは「論理文法分析」）とは、『いま－ここ』における現実が、成員の相互行為、つまりエスノメソドロジー＝「人々の方法」によって構築される仕組みを発見・記述するためのエスノメソドロジーの分析方法である。特に、その場面の録音・録画内容を、発話・視線・動作等々をトランスクリプト化し、それに基づき詳細な分析を進めていくことを特徴としている。
- 9 日本で「エスノメソドロジー」が社会福祉研究として論文化された件数は、現時点で田中耕一郎の 1994 年「ソーシャルワークのエスノメソドロジー－その可能性と意義に関する考察」『福祉と人間科学』花園大学社会福祉学部学会第 5 号、藤田徹の 2001 年「エスノメソドロジーの社会福祉的応用の可能性」『青森大学・青森短期大学紀要』第 24 巻第 1 号、2003 年「エスノメソドロジーは社会福祉を変えられるか？」『青森大学・青森短期大学紀要』第 26 巻－第 2 号、2014 年「エスノメソドロジーにおける社会福祉の研究・教育・実践の新たな『転回』」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第 16 巻、小坂啓史の 2014 年「ケアの場における相互行為を分析するために：エスノメソドロジーの応用可能性に関する考察」『日本福祉大学子ども発達学論集』第 6 号の 5 件であり、また海外では、Gerald de Montigny.

2007 *Ethnomethodology for Social Work* Qualitative Social Work : vol. 6 が確認できる。

- 10 「エスノメソドロジ的無関心」とは、分析対象への研究者側の価値判断や解釈を排し、あくまでもその対象である成員の活動や意味づけを《いま-ここ》における手続きとして記述することへ徹し、その結果極めて純粋な相互作用の仕組みの発見へ導かれ、それ自体は意味のベクトルを持たないが故、その結果への評価や活用に対する無関心を貫くエスノメソドロジストとしての姿勢を表している。
- 11 もちろんソーシャルワーカーにとって「知識・倫理・価値・理論・方法等」は、《いま-ここ》におけるソーシャルワーク実践を構築するための必要不可欠な「ツール」であることに違いはない。

引用文献

- 藤田徹 2015 エスノメソドロジカル・ソーシャルワーカー「手続論的転回」と「気づきのメソッド」の類似性へ寄せて— プイツーツリューション 星雲社
- Gerald de Montigny 2007 *Ethnomethodology for Social Work* Qualitative Social Work vol. 6

pp95-120

- 小坂啓史 2014 ケアの間における相互行為を分析するために：エスノメドロジの応用可能性に関する考察 日本福祉大学子ども発達学論集 第6号 pp21-29
- 田中耕一郎 1994 ソーシャルワークのエスノメソドロジ—その可能性と意義に関する考察 福祉と人間科学 花園大学社会福祉学部学会 第5号 pp169-191

参考文献

- 秋葉昌樹 2004 教育の臨床エスノメソドロジ研究 東洋館出版社
- 秋葉昌樹 2008 新連載 保健室の構造・機能・意味：第1回～4回 保健ニュース第1396・1399・1402・1405-II号付録 少年写真新聞社
- 秋葉昌樹 2009 エスノメソドロジ研究のパフォーマンス—質的調査研究の臨床性およびエスノメソドロジの演劇的異化— 社会と調査 No.3, pp45-51
- 三島亜紀子 2007 社会福祉学の〈科学〉性 ソーシャルワーカーは専門職か？ 勁草書房